

第8章 古代日本語における《大》と《多》 — 終止形オホカリの成立 —

[本章の要旨]

上代以前〈オホ〉は《大》と《多》両方の意味を表し得たが、名詞に冠せられる接頭辞として最も多く用いられ、その場合の意味は《大》に偏っていた。それが、《多》の意を表す他の副詞群の位置を襲う形で副詞形オホクが用いられるようになる。形容詞〈オホシ〉の各活用形成立後は、連用形オホクは《多》の意味に偏り、連体形のうち名詞を連体修飾するオホキは《大》の意味に偏るといふ語用論的差異が生じていたと推測される。それを受けて、平安時代には、連用形オホクから派生したカリ活用〈オホカリ〉は《多》の意味に限定され、オホキから派生した形容動詞〈オホキナリ〉は《大》の意味に限定された。漢字表記による意味の支えを持たない和文においては、《大》《多》両方の意味を担い得る形容詞〈オホシ〉の本活用に代わって、《多》の意に限定されるカリ活用〈オホカリ〉が愛好された。これが、平安和文において、形容詞のうち〈オホカリ〉だけが終止形・連体形においてもカリ活用が用いられる理由である。

[本章中で用いる符号（括弧）について]

本章中では、以下の三種の符号（括弧）を次の意味に限定して使用することとする。

- ・ 《 》 … 意味を表す。《大》は「物理的・実体的に大きいこと、程度がおおきいこと、偉大であること」等の意味ないし意味領域を、《多》は「数量の多いこと、頻度の多いこと」等の意味ないし意味領域を表す。^(註1)
- ・ 〈 〉 … 語または形態素を表す。例えば、〈オホシ〉は（その諸活用形を含んだ）形容詞「おほし」を終止形で代表させて示したもので、単にオホシと括弧を付けずカタカナ書きした場合は、終止形の形態として示したもののか、または、個別具体例として文献上の実例を示したもののかである。ただし、〈オホシ〉はカリ活用の諸活用形を含まないものとし、カリ活用は〈オホカリ〉として別に示すこととする。また、〈オホ〉は、接頭辞オホ～・形容詞〈オホシ〉・形容動詞〈オホキナリ〉等に共通する形態素を示す。
- ・ 【 】 … 文字・表記を表す。具体的に文献上に表記される形である。

以上、例文をもって示せば、「万葉集において【大】は、《多》の意を表す形容詞〈オホシ〉の連体形オホキの表記としても用いられる」といった要領で使用する。なお、その他の符号は一般に通用している用法で用いることとし、特に定義しない。

第1節 問題の所在

平安時代の和文においては、《多》を表す形容詞の終止形・連体形が、それぞれオホカ

リ・オホカルというカリ活用語尾の形をとり、オホシ・オホキという形は使われたい、という事実が知られている。この特殊な現象に関する先行研究としては、夙に吉野1962があり、その主張するところは次の3点にまとめられる。^(1,2)

- (1) 〈オホ〉は《大》をも《多》をも意味した。
- (2) 《大》と《多》の意味を語形の上で区別するために〈オホキナリ〉と〈オホカリ〉に分かれた。
- (3) 平安時代に和文では〈オホカリ〉、漢文訓読文では〈オホシ〉が用いられた。

上にまとめた結論だけを見ると、次の疑問が生じる。第一に、

- (a) 《大》と《多》を語形の上で区別するために両者の語形上の差異化が必要であったとして、それではなぜ、《大》が〈オホキナリ〉、《多》が〈オホカリ〉であったのか？言い換えれば、《大》が〈オホカリ〉、《多》が〈オホキナリ〉とは何故ならなかったのか？

これについて吉野1962は、

「上代すでに、オホクは多の意味で、大の意味に用いた例を知らない。大のほうはおホキニという形をもち、それがやがてオホキナリを生じ、各活用形を有することとなる。そうなれば、オホキは語幹となり、連体形の意識を失ってしまう。多のほうは、やがて、多くのほかは多カリにその職能をゆだねることとなる。このようにして、「大」と「多」とを区別しようとしたのであろう。」(12頁上段)

と言う。確かに、上代、オホクが《多》の意味に限定されるのは事実のようであるし、そうであれば、〈オホカリ〉はおホクからの派生であるから、〈オホカリ〉が《多》の意味に限定されるのも当然であろう。問題は、そもそもなぜオホクが《多》の意味に限定されるのか、また、連体形オホキがあり、そこからオホキニが生まれ、〈オホキナリ〉と活用形をそろえる、そのどの段階で意味が《大》に限定されたのか、ということであろう。

第二の疑問は次のようなものである。

- (b) 《大》と《多》を区別するためなら、〈オホキナリ〉と〈オホシ〉に分化するだけでもよいはずである。なぜ和文で一方は終止形・連体形にもカリ活用を用いるという特殊な形をとるに至ったのか？

これについて吉野1962は、

「大キナリという語を考え合わせてみると、オホシ、オホキという形が、多と大とを区別するのにつづろが悪かったというところに、原因があったと思われる。」(9頁上段 太字は原論文のまま)

と言う。引用部分だけではいささか説明不足の感があるが、論文の論旨全体から推測するに、もし《多》を表すに〈オホシ〉の形を用いると、その連体形オホキの形が《大》を表す〈オホキナリ〉の語幹と紛らわしいからということであろう。しかし、和文で終止形にまでオホカリが使われる理由としては弱いように感じられる。また、漢文訓読文で〈オホシ〉が使われている理由も、

「漢文訓読にオホシが用いられたのは、文字をみて読む語である、体系の単純さ、口調のきびきびしさというような理由からであろう。」（7頁上段）

とあるだけで、文字を見て読むとなぜオホシの形がとられるのか、等々の詳しい理由付けは展開されていない。

さて、上に吉野1962の所説をまとめ、いささかの疑問点も挙げた。しかし、平安時代和文における《多》を表す形容詞の終止形・連体形がカリ活用語尾をとることの理由に、《大》を表すオホキナリとの意味分化と形態分化の相関を考える考え方に根本的に異論はない。形態音韻論的に興味あるこの問題を、吉野1962への疑問点を埋めながら考えてみたい。

なお、《大》と《多》の意味の分化とそれぞれを表す語形の分化は、意味的・語彙的に対をなす、《小》と《少》の意味の分化とそれぞれを表す語形の分化に互いに影響し合っていると考えられる。この点について、上代から平安時代にかけて《大》《多》《小》《少》それぞれを表す語形の分布を精細に調べた先行研究に蜂矢1992が存する。ただし、蜂矢1992では、吉野1962が問題としたテーマ（平安和文においてなぜオホシ・オホキでなくオホカリ・オホカルが使われたか？）については深くは「ふれないこととする」（328頁）としている。本章では蜂矢1992が示した用例とその分布に関する指摘と、吉野1962の示した解釈とに導かれながら、以下に筆者なりの考えを示そうと思う。

第2節 〈オホ〉の原義

2-1

〈オホ〉のもともとの意味は何であったのか、という点について考えてみる時、可能性としては次の三つが考えられるだろう。

(1)《大》が原義で、《多》が転義として派生

(2)《多》が原義で、《大》が転義として派生

(3)原義としては《大・多》が未分化で、後に《大》と《多》が別概念として分化

吉野1962は、「オホは「大」をも「多」をも意味した」（10頁上段）とし、〈オホ〉が接頭辞として使われる場合は「「大」の意味のことが多いらしい。しかし、未分化の場合もある」（10頁下段）と言う。基本的には上の(3)の立場と言えよう。

もとより、ここで「原義」といっても、日本語の起源にまで遡っての議論は不可能である。せいぜい上代の文献に示された状態から、その一つ前の時代にどうであったかを推測するくらいのことである。しかし、その上代の文献における状況も、数多くの漢文的文章中の【大】【多】等の漢字をどう訓読するか、その訓読の形をどの時代のものと認定するかによって大きく変わらざるを得ない。^(7E3)

そこで本章では、先行研究の成果に、次の2点の考察の結果を加えて〈オホ〉の「原義」について考えてみたい。

- ①記紀本文中に見られる神名・天皇名等における接頭辞的〈オホ〉の意味と表記
 ②『万葉集』中における〈オホ〉の意味と表記

2-2

まず注目してみたいのは、記紀本文中に見られる神名等の接頭辞的〈オホ〉である。これらの伝承された名前は、固有名として音形は固定され、またその威徳を名に表した存在として意味も固定されている。その中のオホは、例えば「大小之魚」という本文をどう読んだかということとは別な、表記と読みの結びつきの確かさが存在するはずである。

記紀神話に見られる古代神名、及び、同じく記紀帝紀中の天皇・皇族の人名に使われる美称オホは、命名の由来がわからないものも少なくないが、ほとんどが《大》（言うまでもなく《偉大》の意も含める）の意で付けられていると思われる〔例：天照大御神^{アマテラスオホミカミ}、大国主神^{オホクニヌシノカミ}〕。神名の表記も全て【大】の漢字表記が宛てられ、【多】の漢字表記が宛てられる例はない（もちろんこの漢字選択は神名に漢字表記が宛てられる際の意味解釈の表れであり、命名の由来そのものの直接的な証拠とすべきではなかろうが）。その他の人名・氏族名もオホに【多】が宛てられる例はほとんどなく、唯一の使用例は、『日本書紀』の「多臣（おほのおみ）」（大系上 220頁・下 353頁）で、この氏族名は『古事記』では「意富臣」として出ている。また、オホ氏の一族である『古事記』編者の太安万侶は【太】と表記している。一方、古代神名中の美称オホが、確実に《多》の意味を持っていると解釈できる例もない。《多》の意味の美称としては、「八千^{ヤチ}・八十^{ヤソ}」等の大数・聖数が使われるのが普通であるし〔例：八千矛神^{ヤチホコノカミ}・八十禍津日神^{ヤソマカツヒノカミ}〕、神名以外でその数が多い様を表すにも上記の他「万^{ヨロツ}・千五百^{チイホ}・八百^{ヤホ}・五百^{イホ}」等が名詞に冠されている。もちろん、神名・人物名中に【多】という漢字が存在しないわけではなく、特別に忌避されているわけでもない。夕の音節を表す万葉仮名としては普通に使われている〔例：大多麻流別^{オホタマルワケ}（『古事記』上）〕。

以上の事実は、上代以前において〈オホ〉が《多》の意味を持たなかったということ必ずしも意味しない。しかし、名前に使われる美称以外でも確実に《多》を意味する〈オホ〉の用例に乏しいことも事実である。記紀本文中に【多】が《多》の意味を持って使われる例は多い。ただし、それをオホ…と確実に訓読する音注を伴う例は見えず、古来様々に訓読されてきているのは周知の事実である^(註4)

ことを神名等に限らず、一般的な名詞に冠せられる場合に広げてみても、《大》の意を表す接頭辞的〈オホ〉は数限りない（もちろん、その読みについて百パーセントの保障はないにしても）。一方で、《多》の意を表す接頭辞的〈オホ〉の例はほとんどない。

2-3

次に『万葉集』中における〈オホ〉の意味と表記について述べる。

『万葉集』では、《大》の意の〈オホ〉と、《多》の意の〈オホ〉の両方が現れるので

あるが、その〈オホ〉が【大】または【多】で漢字表記される際に次のような事実が見られる。すなわち、《多》の意の〈オホ〉の表記に【大】が使われることはあるが、逆に、《大》の意の〈オホ〉なのに【多】の表記が使われることがないのである。

実際の詳しい用例とその所在は第3節を参照していただきたいが、形容詞〈オホシ〉の連用形または連体形で読まれている例のうち、

オホク座_{いせ}せど【大座常】、恋ふる夜そオホキ【大寸】、恋ふらくのオホキ【大寸】等は、いずれも原表記としては【大】で、意味としては《多》なのである。また、次の例のように【太】が用いられる場合もある。

恋ふる日そオホキ【恋日太】

これらのうち、連用形の例はオホク以外の読みの可能性もないわけではないが、連体形の例は【寸】の「送り仮名」からみてもオホキの読みは確実であろう。

一方、これに対して、《大》の意の〈オホ〉に【多】の表記が見られないということは、《大》《多》の意味の分布と【大】【多】の表記が、ただ単に混乱しているわけではなく、〈オホ〉と【大】との結びつきが、読み（訓）と漢字との結びつきとして熟していたために、意味としては《多》である場合にも、読みを導く機能が優先されて【大】の表記がなされるケースがあったのだと解釈すべきであろう。【多】のほうは、相対的に〈オホ〉との結びつきが弱いために、オホという読みの表示のためよりも、《多》の意味表示の機能のために用いられていたということになる。

2-4

上の、記紀における分布と『万葉集』における表記のありかたは、上代の〈オホ〉が《大》の意、ひいては【大】の表記との結びつきが強く、〈オホ〉における《多》の意味は副次的ないし派生的な意味であったのではないかということ疑わせる。「原義」ということでは、本節冒頭に掲げた三つの可能性の中で、

(1) 《大》が原義で、《多》が転義として派生

という可能性も考えられるところである。「原義」についても、また、上代文献中の【大】や【多】を如何に訓読すべきかという問題についても、結論は留保すべきであるが、〈オホ〉が《多》よりも《大》と強く結びついていたとは言える。

第3節 『万葉集』における文中の位置と意味の分化

さて、次に『万葉集』における状況について考えたい。中心的な興味は、《大》《多》それぞれの意味で使われる形容詞〈オホシ〉の諸形態が『万葉集』中の歌でどのような分布を示していて、それが上代の言語全体のどのような状況を反映するものか、という点である。

『万葉集』においては、〈オホシ〉は《大》《多》両方の意味に使われているが、副詞

形オホク^(#5)と助詞ソ・ノを受ける叙述形オホキ^(#6)は《多》の意味に限定され、連体修飾形オホキ^(#7)は《大》の意味にと、用法によって分化して使われているのが目立つ。以下に実際の用例を掲げて示す。

(a)副詞形オホク

オホクの訓が確定できるのは次の2例のみである。

- ・直^{ただ}に逢はず在^あら^らくもオホク【於保久】敷^し栲^たへの枕^{まくら}離^{はな}らずて夢^{ゆめ}にし見えむ(巻五 809)
- ・さ寝^ねる夜はオホク【於保久】あれども物思^{ものおも}はず安^{やす}く寝^ねる夜は実^{まこと}なきものを(巻十五 3760)

意味は両例とも《多》の意味で用いられている。次の例は読みが確定的でないが、オホクと読まれている。

- ・…藤原の都^{みやこ}しみみに人はしも満ちてあれども君はしもオホク座^{いざ}せど【大座常】…(巻十三 3324)

表記は【大】であるが意味は《多》である。次の例もサハニという別訓があるが(岩波古典大系本等)オホクとも読まれる。

- ・…天の下八島の中^{うち}に国はしもオホクあれども【多雖有】里はしも多^{おほ}きにあれども【沢爾雖有】…(巻六 1050)

(b)叙述形オホキ

①係助詞ソの結び

- ・橘の花散る里の霍公鳥^{ほととぎす}片恋しつつ鳴く日しそオホキ【多寸】(巻八 1473)
- ・秋萩を散らす長雨^{ながあめ}の降る頃は独り起き居て恋ふる夜そオホキ【大寸】(巻十 2262)
- ・うつせみの常無き見れば世のなかに情^{こころ}つけずて思ふ日そオホキ【於保伎】一に云はく、嘆く日そオホキ【於保吉】(巻十九 4162)

等、読みの確実なものが8例あり、いずれも《多》の意味である。また、

- ・人に見ゆるうへは結びて人の見ぬ下紐あけて恋ふる日そオホキ【恋日太】(巻十二 2851)
- ・み吉野の蜻蛉^{あまつ}の小野に刈る草^{かき}の思ひ乱れて寝^ねる夜しそオホキ【宿夜四曾多】(巻十二 3065)

等、読みの不確実なものが4例あるが、これらも意味は《多》である。

②格助詞ノを受ける叙述形

- ・潮^{しほ}満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくのオホキ【大寸】(巻七 1394)
- ・玉梓^{たまづき}の君が使ひを待ちし夜の名残りそ今も寝^ねぬ夜のオホキ【大寸】(巻十二 2945)

の2例があるが、いずれも《多》の意味である。

(c)連体修飾形オホキ

- ・一日^{ひとひ}には千たび参りし東^{ひろみ}のオホキ【大寸】御門^{みかど}を入りかてぬかも(巻二 186)

・オホキ【於保吉】海の水底みなそこ深く思ひつつ裳も引きならしし菅原の里（巻二十 4491）の2例は《大》の意味。このほかに、

オホキいくさのきみ（大將軍）・オホキすめらみこと（太上天皇）・オホキひじり（大聖）・オホキまつりごとびと（大判官）・オホキものまをすつかさ（大納言）・・・等の官位名を中心とした複合名詞における接頭辞的オホキが多数存在するが、これらは意味的には全て《大》と考えられる。

また、次の例の「一云」の本文「木陰多 暮月夜」を「こがくれオホキゆふづくよ」と読むと、《多》の意味の連体修飾形となるが、もしそう読むとすると唯一の例外的な用法ということになるため、「こがくれオホミ…」と読む訓法にしたがうべきであろう。

・春されば樹きの木の暗くれの夕月夜ゆふづくよおぼつかなしも山陰やまかげにして 一に云はく、
【春去者 木陰多 暮月夜】（巻十 1875）

また、次の例はカリ活用連体形の形で連体修飾しているが、これは「オホク有る」の原義が生きている《多》の意味の副詞形オホクに準ずるものであろう。

・初雪は千重に降りしけ恋しくのオホカル【於保加流】われは見つつ偲はむ（巻二十 4475）

これらの例は、蜂矢1992が「大きい意の例は、上代において既に連体形オホキの連体法という限定的な用法しか持っていないことが注意される」（323頁）と言うとおりの状況を示していると言えよう。

(d)その他の活用形

終止形オホシの確かな例は『万葉集』には見られない。

〔未然形〕

《多》の意に用いられたオホケ（ム）が見える。表現類型としては叙述形オホキと同じ。

・都方みやこへに立つ日近づく飽くまでに相見て行かな恋ふる日オホケム【於保家牟】（巻十七 3999）

〔已然形〕

万葉仮名表記例は見られないが、オホケ（ド）・オホカレ（ド）と読まれる例が見られる。

・…遠近まちとちの島はオホケド【雖多】…（巻二 220）

・ももしきの大宮人はオホカレド【雖多有】心に乗りて思ほゆる妹（巻四 691）

・山の辺へにい行く獵夫きつはオホカレド【雖大有】山にも野にもさ男鹿鳴くも（巻十 2147）

いずれも意味は《多》と解釈でき、オホカレ（ド）の例はオホカルと同じように副詞形オホクに準ずるものと言えよう。

以上に見るように、『万葉集』では基本的に

《大》＝連体修飾形オホキ

《多》＝副詞形オホク・叙述形オホキ

という分布を示す。これらの違いは直接には『万葉集』の時代の韻文における修辞類型の違いである。それでは、これらの韻文の背景・基盤として存在した音声言語ではどのような状況であったと考えられるだろうか。それを確かめる一次的な資料というものは存在しないが、上のような表現類型による《大》《多》それぞれへの意味の偏りは、韻文に限らず広くそういった語用論的使い分けが存在した可能性を示唆するものと考えたい。次節に展開するように、そう考えると以後の《大》と《多》の意味と形態の分化を説明しやすくなることは確かなのである。

第4節 《大》と《多》の意味と形態の分化

吉野1962及び蜂矢1992の成果に、上の第2節・第3節の考察の結果を加えて、本研究では《大》と《多》の意味と形態の分化を次のように推測する。

4-1

まず、上代において、〈オホ〉は《大》の意と強く結びつき、物理的に大きい・程度が大きい・偉大であるといった意味を実体的概念である名詞に添える連体的接頭辞オホ～として広く使われている。形容詞語幹が接頭辞的に用言に直接上接する「高行く」「速飛ぶ」のタカ～・ハヤ～のような連用的用法はオホ～には見られない。オホ～はそれ自体体言的概念としてあり、用言との共起はもともとなじまなかったのではないかと思われる。一方、《多》の意を表すには大数・聖数が名詞に対して接頭辞的に使われたり、用言に対してはサハニのような副詞相当の語（他にもアマタ・ニヘサニ・マネク・コキダ等）が次の例のように多く用言を連用修飾する形で使われていたと思われる。

・忍坂^{おさか}の 大室屋^{おほむろや}に 人サハニ 来入り居り 人サハニ 入り居りとも（『古事記』中「神武天皇」・『日本書紀』神武天皇）〔サハニの原表記：『古事記』…佐波爾、『日本書紀』…瑳破而〕

なお、オホ～が連用的用法を持たないのに対して、サハニのサハが次のように連用的接頭辞となった用例が見られる。

・やつめさす 出雲健^{いづもたける}が 佩^はける刀^{たち} 黒葛^{くろくさ}サハ纏^{まき} さ身無しにあはれ
（『古事記』中「景行天皇」・『日本書紀』崇神天皇）〔サハマきの原表記：『古事記』…佐波麻岐、『日本書紀』…佐波磨枳〕

ただし、サハ～が連体的接頭辞として使われた確実な例は見つからないようである。

つまり、上代（ないしそのもう一つ前の時代）において、あるものが《大》であることを表す表現類型として、連体的接頭辞オホ～を用いた「オホ岩有り」「オホ鳥を得つ」のような連体修飾の型が非常に多く使われるのに対して、一方あるものが《多》であることを表す表現類型として、「岩サハニ有り」「鳥サハニ得つ」のような連用修飾の型が多く使われていたと言えよう。

さて、ここに上代の末に至るまでに、〈オホ〉が、他の形容詞と同じく、連用形語尾にク・連体形語尾にキ・終止形語尾にシを伴うなど活用語尾を完備するようになると、名詞と結合する「オホ岩」「オホ鳥」の型（繰り返すがこの型は極めて頻用されていた）を継承する連体修飾形「オホキ岩」「オホキ鳥」は、接頭辞オホ～を引き継いで《大》を意味する用法に限られ、一方、「岩サハニ有り」「鳥サハニ得つ」のサハニに入れ替わる形となる「岩オホク有り」「鳥オホク得つ」の連用形オホクは、語用論的に《多》の意味を担うものとなったと考えられる。

上の意味と形態の分化は、あくまで語用論的なものであり、オホキが《大》の意味に偏るのも、連体形の用法全部に及ぶことではなく、連体修飾形に限られるものであろう。2節で見たように、連体形でも「～日ぞオホキ」「～夜のオホキ」といった形をとる叙述形オホキは《多》の意の類型的表現として用いられている。

さて、オホク・オホキ以外の形容詞〈オホシ〉のその他の活用形は、上代の用例が少なく、どちらの意味に限定されていたかは何とも言えない。例えば、終止形オホシは、上代の文献に確実な例が見られない。これをもって終止形の形が当時の音声言語においても使われなかったと言えるのだろうか。それよりも実際は他の形容詞に類推して終止形オホシの形も使われることがあっただろうと推測するほうが自然ではなかろうか。そして、もし使われる場合には《大》と《多》双方の意味をその場の文脈（話脈）に応じて担いながら使われていたろうと思われる。もちろん、實際上《大》と《多》どちらの意味であるかは、主語との関係、被修飾語との関係、文脈との関係において明らかな限りの使用であり、なお紛らわしくてどちらの意味かを明示する必要がある場合には、上の「オホキ〇〇」（《大》の意の場合）または「〇〇オホク～」（《多》の意の場合）の表現類型が選択されたであろう。

4-2

上記形容詞〈オホシ〉の語用論的意味分化の中で、連用形オホクは《多》の意味に限定されて使われていたと考えられる。一方、連体形オホキの中、連体修飾形は、《大》の意に限定され、連体的接頭辞オホ～の用法を引継ぐ美称接頭辞・高位の官位を示す接頭辞の用法が汎用されるために、独立した形容詞としてよりも、名詞の一部としての意識が強く、「高き・速き」などと異なりオホキ全体が体言的に意識された。接頭辞オホ～と連体形オホキとの違いは、結び付く名詞との結合度の相対的な強弱の差に過ぎなかつたであろう。

例えば、

オホキオホトモヒ（大弁）

という官名は、それ自体一つの名詞であり、トモヒに美称のオホ～が結合したオホ＝トモヒに、大・中・少の差異を示すオホキが更に結合したもので、結合度はオホ～とトモヒの結合がより強く、オホキとオホトモヒの結合は相対的に弱い。このことは第7章で論じたとおりである。

一方の《多》の意味では、連用形オホクの他に叙述形オホキもあり、更にカリ活用の発達によって連用形オホクから派生する諸活用形が充足されていったのに対して、《大》の意味は連体修飾形オホキに限定されていた。上代のこのような状況の中、活用の語形変化系列(paradigm)の中でいわば空欄となっていた《大》の意の連用修飾形を埋める形として、体言オホキに副詞語尾ニが付いたオホキニが現れる。そして、一旦オホキニが生まれれば、それに形式用言アリが熟合し、これまた当時発達を遂げていたナリ活用形容動詞オホキナリの形をとることによって、《大》の意に限定されつつ各文法機能を完備する形容言として形容動詞〈オホキナリ〉が成立したのである。この時期は蜂矢1992がその確実な用例を報告しているように平安時代初期の頃であろう。

4-3

本章の中心テーマである「平安時代和文における終止形オホカリ・連体形オホカルの専用」について述べる。

上代から平安時代に向かって、形容詞全般にいわゆるカリ活用が発達するにつれ、〈オホシ〉でも〈オホカリ〉が生まれた。カリ活用は、連用形〜クにアリが結合して生まれたものである。〈オホシ〉の場合、連用形オホクがもともと《多》の意味と強く結びついてきたため、〈オホカリ〉の諸活用形も《多》の意味を担うものとなった。言い換えれば、《多》の意味と強く結びついたオホクがアリを介することによって、連用機能だけでなく他の文法機能をも持つことができることとなったわけである。

例えば、《多》の意味の形容詞を文終止の述語として使う時、《大》の意の連体形オホキと《多》の意の連用形オホクと両方の語形変化系列の中にある終止形オホシでは、その意味が一義的に決定できない。その意味の決定を文脈に頼らざるを得ないオホシではなく、《多》の意に限定されるオホカリを使うことができるようになったということである。

連体形についても同様であるが、同様という以上にオホキは前述のごとく連体修飾形として《大》の意味に限定されているから、《多》の意味としてはオホカルが用いられることとなった。

築島1987は次のように言う。

「和文の中で、「多し」という語だけが、終止形に「多かり」、已然形に「多かれど」「多かれば」などの例を多く用いている。これに対して、漢文訓読では「多シ」「多ケレ」が一般的であって、「多カリ」の例は、極く稀にしか現れない。同じ平安時代に在って、文脈の相違によって語形の異なる一つの例であるが、訓読において直截的な表現として「多シ」が使用されることは理解出来るし、これに対して、和文において「あり」を含んだ「多かり」が用いられるのは、その表現上の婉曲性に因るとして一往説明し得るようにも思われる。しかし、どうして「多シ」「多かり」の一語に限られ、他の形容詞には及ばないのかということは、やはり未解決の問題とせざるを得ないであろう。」

(199頁)

形容詞の本活用に対してカリ活用が「婉曲な表現」であるという考えは納得しがたい。それよりも、本章のように考えることによって、なぜ《多》の意を表す形容詞にカリ活用〈オホカリ〉が用いられ、そのようなケースが〈オホカリ〉一語に限られたかも説明がつくように思われる。なお、和文は、漢文訓読文と違って、後の4-4に述べるように漢字表記の支えを前提とできない文体であるから、その点からも《多》の意には〈オホカリ〉が専用されることとなったのであろう。

また、平安和文において〈オホカリ〉が専用されるといっても、本活用の例が全く見られないわけではない。已然形については省略し、終止形オホシ・連体形オホキの例を次に示す。

[終止形オホシの例]

- ・若宮、様器やうきに入々御つき入れさせ給ふ。「オホシや」と聞こえ給へど「いないな」とて溢こぼさで参り給ふ。(うつほ物語 蔵開上 古典大系二288頁)

[連体形オホキの例]

- ・庵いほオホキしでのたをさは猶たのむわが住む里に声し絶えずは(伊勢物語 43段 古典大系137頁)

この例は、「名のみたつしでのたをさは今朝ぞなく庵あまたとうとまれぬれば」という女の歌に対する男の返歌であるから、このオホキは《多》の意味である。

- ・限りなき色好みにて、広き家にオホキ屋やども建てて、よき人々の娘、方々に住ませて、住み給ふありけり。(うつほ物語 藤原の君 古典大系一168頁)

この例も前後の文脈及び類似表現から見て「大き屋」ではなく、「多き屋」と解釈すべきであろう。

- ・内裏うちの召しなどにも参り給はぬ時オホキを(うつほ物語 国議中 古典大系三181頁)
吉野1962では、『うつほ物語』の終止形の例を、〈オホカリ〉が中世以後本活用〈オホシ〉に取って代われ、他の形容詞と同じ活用形態になっていく先駆的事実として扱っている(9頁上段)。しかし、連体形の例も含めて考えるに、たとえ伝本の信頼性に問題はあるにしろ、これらの例は当時〈オホシ〉も〈オホカリ〉も両方使い得たことを証するものではなかろうか。そして、『伊勢物語』『うつほ物語』よりも後に成立した『源氏物語』や『枕草子』等は〈オホカリ〉専用であることを考えると、『伊勢物語』『うつほ物語』の状況は、〈オホカリ〉を専用するという平安和文においての文体的様式が固定する前の状況を反映していると考えられるのではないだろうか。

4-4

平安時代の訓点資料の漢文訓読文では、《多》と《大》を表す語形(及びその主要な活用形)は概ね次のような分布を示す。

《多》…形容詞〈オホシ〉

- ・其の父母多ク財産有(り)て(金光明最勝王經古点)

・汝は能く利益する所多し（無量義經古点）

・飢饉多キコトと（金光明最勝王經古点）

《大》…形容動詞〈オホキナリ〉

・長ク大キにして利（か）らむこと鋒の如（くあら）むトキに（金光明最勝王經古点）

・靈フヤシク景ホキなる（コト）（弥勒上生經贊平安初期点）

《多》の意の〈オホカリ〉も、次のような例が拾えるが、

・衆生疾病多かるコトト有（ら）む（金光明最勝王經古点）

訓点資料全般から見れば、〈オホカリ〉は稀であること築島1969が次のように言うごとくである。

「830-01金光明最勝王經に「多カル」の例が見えることは上述の通りだが、これは訓点資料として例外的である。1100-023法花玄義に、「含容せる所多カレトモ而も積聚死きを」（多所含容而死積聚）（巻第一）とあるものなどは、極く稀な例である。」

（482頁）

漢文訓読文において、《大》の意を〈オホキナリ〉が担うことには特に問題がないとして、《多》の意を担う形がなぜ〈オホシ〉だったのだろうか。このことについて、築島1987は、4-3に引用したごとく「訓読文における直截的な表現」として〈オホシ〉がとられたものとし、吉野1962も、第1節で引用したごとく「文字をみて読む語である、体系の単純さ、口調のきびきびしさ」といった理由を挙げる。いずれも曖昧な理由であるが、吉野1962の言う「文字をみて読む語である」という点は注目に値する。

漢文訓読文は、言うまでもなく漢文の本文が存在して初めて訓読文となる。当該部分の意味が《大》であるか、《多》であるかは、本文の漢字によって初めから与えられている。したがってその「読み」としては、必ずしも排他的・一義的にどちらかの意味に専用される語形である必要がなかったと言えよう。

この訓点資料における状況は、《大》と《多》が形容詞〈オホシ〉の語用論的差異として意味の違いを示していた時代から一步進んで、形容動詞〈オホキナリ〉が《大》を専用に表す語として使われることによって、相対的に形容詞〈オホシ〉が《多》の意味に限定されてきている状況を反映するものであるが、相対的な区別からさらに一步進んで〈オホカリ〉の使用という絶対的な《大》と《多》の区別にまで進まず、そのまま文体上固定化した姿であると考えられるのである。

一方、このような訓点資料における漢文訓読文の特質との対比で言えば、4-3で論じた平安和文は、ひらかな表記を主体とした書記言語であるために、漢字表記による意味の支えを持たない。したがって、《大》《多》両方の意味に相渡って用いられ、その意味の弁別は語用論的な差異に過ぎない形容詞〈オホシ〉の本活用に代わり、《多》の意に限定されるカリ活用〈オホカリ〉の使用が好まれ、ついに〈オホカリ〉専用の文体的特質を得るに至ったものと考えられるのである。

第5節 本章のまとめ

以上、平安和文における〈オホカリ〉〈オホキナリ〉の意味と形態の分化に至る歴史の変遷の解釈を示した。最後に要点を箇条書きにまとめると次のようになる。

- ①上代以前〈オホ〉は《大》の意を中心に用いられ、《多》の意は派生的であった。
- ②形容詞〈オホシ〉は基本的に《大》《多》両方の意義を表し得たが、連体修飾する連体形オホキは《大》の意、連用形オホクは《多》の意に限定されて使われた。
- ③連体修飾の連体形オホキから《大》の意の形容動詞〈オホキナリ〉が生まれた。
- ④連用形オホクから《多》の意専用のカリ活用〈オホカリ〉が生まれ、《大》《多》両方の意味を担い得る〈オホシ〉に代わって、平安和文では本活用ではなくカリ活用が専用された。

本章は、

[形態の分化は、意味または機能の分化と連動する]

言い換えれば、

[異なる意味または機能は、異なる形態によって担われた方がコミュニケーション上有利である]

という形態音韻論の基本的な考え方を前提とし、〈オホ〉の諸形態の発生と展開を《大》と《多》の意味をそれぞれ担う情態用言の展開の歴史として解釈したものである。

なお、〈オホ〉全体の変遷を論ずるには、《大》《多》の対義関係にある《小》《少》を表す諸語の変遷との関わりを考慮する必要があることももちろんであり、蜂矢1992はまさにそのような研究であるが、本章では、冒頭に述べたように平安和文において〈オホカリ〉が用いられるに至る経緯が中心的興味であり、その限りにおいて《小》《少》を表す諸語の状況とは一応切り離して論じることができると判断し、《小》《少》を表す諸語については議論に含めなかった。また、形容詞〈オホシ〉の未然形・已然形における形態の問題も多くは省略した。

〈第8章・注〉

- (1) 定義としては不完全であるが、《大》と《多》は本来類義関係にあり、両者の境界は時に曖昧である。本章の目的は、この両者の意味論的探求ではなく、両者の意義と形態の分化の実態を歴史的に観察するのが目的なので、両者の厳密な弁別的定義はあえて下さないで議論を進める。
- (2) 吉野1962の論述の順序としては、この3点はおおむね(3)→(2)→(1)の順で論じられている。本章では歴史的展開の順に沿った形で箇条書きした。
- (3) 記紀本文中、接頭辞以外に用言として用いられ、読みが確実な〈オホ〉の例はきわめて少ない。次の記紀歌謡の例オホケクは、有名な例であるが、《多》の意とする注釈書が多く、蜂矢1992の言うように対句的表現の対応関係からしても、そう解したほうが

良いように思えるが、前後に意味不明語句や上代特殊仮名遣の存疑例もある歌謡ゆえ、
確実な例とは言い難い〔吉野1962ではこの例も「大の意にとるのがよくはあるまいか」
(11頁下段)としている〕。

… 前妻^{こなみ}が 肴^む乞はさば 立ちそばの 実の無けくを こきしひゑね
後妻^{うはなり}が 肴^む乞はさば いちさかき 実のオホケクを こきだひゑね …

(『古事記』中・『日本書紀』神武天皇)〔オホケクの原表記：『古事記』…意富
祁久、『日本書紀』…於朋鷄句〕

- (4) 吉野1962でもその点を指摘し、論文末に種々の訓読の状況を例示している。現代注
釈書の記紀の本文読み下しでは、岩波古典大系『古事記』では【多】を「さはに」「ま
ねく・まねき」「あまたの」などと訓読し、岩波古典大系『日本書紀』では統一して
「さはに」と訓読している。ちなみに、記紀では〈オホキナリ〉の確実な用例も得難い。
(5) 〈オホ〉に副詞を作る接尾辞クが付いて連用修飾の機能を担う形をここでは副詞形
と呼ぶことにする。形容詞の活用形としては連用形のことであるが、ここでは形容詞
〈オホシ〉の諸活用が完備しているか否かとは一応切り離して考えるためにこの用語を
用いる。
(6) 連体形オホキの形で、その属性を持つ名詞に後置されて主述関係の述語となってい
るものを叙述形と呼ぶこととする。
(7) 連体形オホキの形で、その属性を持つ名詞に前置されて連体修飾語となっているも
のを連体修飾形と呼ぶこととする。

〈第8章・参照文献〉

- 築島1963 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東京大学出版会 昭和38年3
月
築島1969 築島裕『平安時代語新論』 東京大学出版会 昭和44年6月
築島1987 築島裕『平安時代の国語』(国語学叢書3) 東京堂出版 昭和62年4月
蜂矢1992 蜂矢真郷「多少と大小」『記紀万葉論叢』 塙書房 平成4年5月
吉野1962 吉野忠「「おほかり」と「おほきなり」」『日本文学研究』第5号 昭和37年
1月

*本章中の『万葉集』の歌番号は、旧国歌大観番号に依った。